

# 中高一貫校における公民科教育と授業研究

— 清泉女学院中学高等学校教諭・梁瀬正彦氏の授業を対象として —

西 永 兼 康 (長野清泉女学院中学・高等学校)

## 1. はじめに

従来の中高一貫教育の見直しが私学における喫緊の課題となり、現在、様々な問題についての研究が積み重ねられている。たとえば学校組織の問題や、中学校と高等学校との教育課程、いわゆるカリキュラムの連関性の問題などについてである。しかし中高一貫教育をより一層豊かにするためには、実際の教育活動、就中、授業研究の領域での取り組みがより求められよう。現在、教育学において旺盛な研究業績が挙げられている分野の一つに、授業研究の分野がある。この分野の研究は、授業を記録する映像機器の進展という技術的な要因が認められる中で、佐藤学らによって導入された「省察」(reflection) 概念によっても基礎づけられ、一連の研究成果が生み出されるに至っている。筆者は、豊かな授業実践を積み重ねている中高一貫校において、自らの担当教科である公民科の領域の授業研究を、なお一層進めていきたいと考えている。

## 2. 本研究の対象としての梁瀬正彦氏の授業および授業者としての氏

本研究の対象授業の授業者は、著者の姉妹校である清泉女学院中学高等学校の公民科教諭の梁瀬正彦氏(やなせ・まさひこ、以下、氏と記す)である。氏は講師として上智大学の社会科・公民科教育法の授業を持たれた一級の教育者であるが、氏の真骨頂は勤務校の中学高等学校での日々の授業実践において発揮されている。たとえば氏の授業を受けた高校生が、新聞に投書した「声」に以下のものがある。



写真1：授業中の梁瀬正彦氏

＜私の通う高校の政治経済の授業はとてもユニークです。授業の題材は、新聞記事の抜粋が主な、先生手作りのプリントです。授業の後に何をどれだけ考え、感じたかを思い思いにつづって「リアクションペーパー」として提出します。先生のコメントが返ってくるので、先生と文通している感覚です。ただ受け身になりやすい他の授業と違い、生徒一人ひとりに注がれる先生の愛情をととても感じます。先生の頑張りが、勉強しようという意欲をかき立ててくれます。また、先生が一生懸命録画、編集したテレビ番組などのビデオも見ます。社会科室の棚には何百本というテープが詰まっています。…授業を通じて私は、世界で起こる出来事、現実を、偏見を持たずに自分の目で確か

め、前向きに生きなければ、と学ぶことができました。＞(『朝日新聞』、2007年6月15日、「声」)。

本研究は、斯くような氏の授業、および授業者としての氏を対象とする。なお、本研究の詳細な記述は「研究成果報告書(別冊)」に委ね、本稿はその概略を記すのに止めるものとする。

## 3. 梁瀬正彦氏の授業の方法とその実践

### 1) 今回の研究対象授業の概要

本研究の対象授業は以下の通りである。対象授業日：2009年11月12日(木)13日(金)、「政治・経済」(高3年必修授業)4クラス、各1時間(45分授業)、合計4時間、「時事問題」(高3年選択授業)1クラス、

合計2時間、総計6時間。二台のビデオ装置により授業映像を記録し、氏と生徒にインタビューを行った。

## 2) 授業方法

氏の授業では教科書を用いない。板書もせず、生徒もいわゆる「ノートをとる」ことをしない。その代わり、以下のツールを用いて授業を展開している。

- ① LFNのプリントおよび他プリント：LFN (learning from newspaper) との造語をもって氏が呼んでいる、新聞の記事のプリントである。氏が前もって線を引き、強調されている。また後述の「リアペ」をまとめたり、氏の授業の感想を記したプリントも配布されている。
- ② LFNを有効化させるためのOHP：LFNの時間で、プリントを映写したり、直接、新聞をOHPで見せている。
- ③ 収集映像のプロジェクター映写：普段より撮りためているドキュメンタリーやニュースなどのテレビ番組を氏が編集して、適宜、見せている。
- ④ リアクションペーパー：氏はテストを行わず、B6で作成された用紙に、リアクションペーパー（「リアペ」）として生徒に記すことを課している。生徒は直接授業の内容に回答したり、その内容に触発された様々な事柄について記す。授業中にリアペを記したり、また授業毎に長文の克明なリアペを提出する生徒もいる。またある生徒はリアペの代わりに、授業毎に「ヤナセ日記」と称する、氏の似顔絵入りの日記風の文章をノートに綴り提出している。リアペは特に提出の義務の枚数などはないが、評価の対象となっている。

## 3) 授業の主題

氏の授業での最近のひとつの大きな主題は「偏見」「決めつけ」であろうか。現代の社会に蔓延している様々な偏見を除き去り、社会と他者と自己を見つめる自由な視点を生徒に与えようとしている。ここ数年の氏の授業のキャッチフレーズは「ストップザ決めつけ」である。

## 4) 授業の典型的な場面

- ① 「新聞は世界への窓」(『朝日新聞』、2009年10月11日掲載、日本新聞教育文化財団広告)



写真2：少女の表情を写す

氏はNIE運動の「新聞は世界への窓」と題する広告に掲載された写真をOHPで提示する(写真2)。「この子、すごい顔しているでしょう。わあっ、発見した時の顔ですね」と語りかけ、授業における発見・驚きの重要性を示唆する(実際の写真は長倉洋海氏撮影のコソボの少女の喜びの表情である)。授業が「世界への窓」であることを示し、その中で発見し驚くことが授業の一つの眼目であることを語っている。

- ② 「ザ・ノンフィクション汗と涙のダンボール人生総集編」(フジテレビ系列、2008年7月6日放映)

氏は偏見や差別の目に晒されている人々が、その人々なりに精一杯に生きている姿を、ドキュメンタリー番組を通して生徒と共に観て(共観)、生徒と共に主人公の心に深く思いを致す(共感)。写真3は、知り合いの老女性が入院中、彼女の僅かな金がおそらく同じ様なホームレス状態の人々によって盗まれて、そのことを憤っているダンボール集めが生業の男性の姿である。この時に氏は画像を止め、席から立ち上がり、この男性の憤り「汚いじゃないか!人間として」を氏も口に出し、涙する。共観し、共感する氏。典型的な氏の授業中の姿である。



写真3：生徒と共観し、主人公に共感し、涙する氏

- ③ 「奇跡体験!アンビリバボー」(フジテレビ系列、2008年9月4日放映)

ここで上記番組の中のアメリカの自閉症の高校生ジェイ・マック君の映像を映す。彼はバスケットボール好きだが、身長が低く、コミュニケーションの問題もあり選手にはなれないが、部のマネージャーとし

て黙々と働く。ただシュート練習だけは、居残って毎晩懸命に励む。そして「シニアナイト」と呼ばれる控え選手が出場できる試合で、異例なことに彼が選手に抜擢され、その試合の得点王となる。写真4は、試合で初めて彼のシュートが決まった瞬間を観いている生徒たちの表情である。ここにも心動かされる顔がある。氏は語りかける、「可能性は誰にでもある。決して決めつけてはいけないことです」と。



⇒ 写真4：①～④：ひとりの少年の可能性に心動かされる生徒、その表情の連続写真

#### 4. 生徒のリアクション

氏の授業に対する生徒のリアクションは実に豊富にあるが、氏の論文の中で紹介された一人の生徒の感想を紹介することで代えたい。

くどうしても学校にいと、なんかすごく狭い世界と価値観で、きつきつの正方形の部屋にいるみたい。あっちでぶつかり、こっちでぶつかり、…けど、『政経』の時間だけは、その部屋壁がパタッと開いて本当の大きい『世界』を見せてくれる。…こんな考えがあるの、こんな人もいる、こんな世界がある、いろんな人生をのぞき見して、自分の人生を振り返る。<sup>\*1</sup>> (傍点著者)

くこの3年間、公民・政経は、毎日、勉強、勉強に追い立てられている私たちにとって、まさに『オアシス』のような授業でした。そして、自分が本当に知りたいことを教えてくれる授業でした。…『私ができることって一体なんだろう?』と考え、自分の存在を、今いるポジションを認識し、自分の意見を確立していくことを学ぶことができましたと思います。…自分の存在を知ることができる授業、頭ではなく、心に訴えてくる授業、おしつけでなく本当に私たちのための授業だったと思います。<sup>\*2</sup>> (同)

#### 5. 授業者梁瀬正彦氏の特徴

氏の授業や授業者としての氏の特徴を、氏の記した一次資料の論文<sup>\*3</sup>や、また授業で使用したプリントやインタビューを参考にしながら、以下のようにまとめる。

##### 1) 知識注入を目的とする授業にアンチテーゼを放つ氏

氏は、氏の授業において、「青少年の収容所」である学校で、知識注入をその目的とする受験体制への強烈なアンチテーゼを放つ。その姿勢は知識の規範たる教科書を使用しないことにおいて示されている。ただし氏は、公民的な知識の習得を否定してはおらず、大量配布される LFN のプリントはその証左である。



写真5：共観する氏  
(前述の「ヤナセ日記」より)

##### 2) 収集映像を生徒と共観し、リアルな人間に共感する氏

氏は、授業において「リアル」な人間を主題とし、人間としての「フィーリング」を養おうとしている。そのために様々な映像を積極的に収集し、生身の人間の生きる姿が如何にドラマチックであるかを示す。氏は収集映像を生徒と共に観て(共観)、生徒と共に主人公の心に深く思いを致す(共

感)。その姿勢が生徒の共感を生み、教室が、えも言われぬ感動の空間と化す。生徒はその空間での授業を、「魂を相手にした授業」「心に訴えてくる授業、おしつけでなく本当の私たちのための授業」と感じ、「自分を見つめて浄化してくれる時間」「アオシス」と称する。

### 3) 偏見や決めつけから自由になることを教える氏

氏は、この社会に様々な形で蔓延している先入観・固定観念から自由になることを教え、「本当の大きい『世界』」を見つめるように説く。特に、社会の中で差別・偏見を受けている人々に、それぞれに尊い人生があり、また様々な可能性を秘めていることを示し、生徒は自らの人生をも振り返る。その授業を受けた生徒は「頭が粘土のように柔らかくなった」と語る。

### 4) 「主題・探究・表現」モデルを希求する氏

氏は、知識の習得を目標とし、如何にその目標が達成できたのかを評価する「目標・達成・評価」モデルの教育ではなく、人間という主題を、生徒と共に探究し、氏が授業において、そして生徒が「リアペ」によって表現するという「主題・探究・表現」モデルの教育を希求している\*4。

### 5) 生徒にメッセージを送り続ける氏

氏は、生徒が「心に、魂に届く『先生からのメッセージ』を心から望んでいる」「それを糧に、少しでも自分を高めたいと強く望んでいる」と確信し、人が如何に生きるのかという倫理的授業を展開する。氏の放つメッセージによって、生徒は「人間としての在り方生き方」に思いを馳せ、学校という「きつきつの正方形」の壁が「パタッと開かれる」ような経験をする。その授業は生徒にとって「一生モノ」の授業となり、生徒をして「先生の教えてもらったことを胸にぶっさして社会に大手を振って出ていきます」と言わしめる授業となる。

## 6. おわりに — 梁瀬正彦氏が実践・提起している事柄をめぐって

社会のリーダーを輩出してきた中高一貫校であるが、そこにはユニークな授業実践が積み重ねられ、確かな評価を得てきた。氏の授業実践もそのような「名物授業」として評価されるであろう。ならば氏の授業は特異な授業であろうか。2009年に告示された『高等学校学習指導要領』によると、高等学校公民科の目標は、「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う」ことであるが、氏の授業は字義通りに、この目標を実践しているのだ。もし氏の実践が他の授業と較べて特異なものであるならば、他の普通の授業は、もはや「指導要領」の目標から逸脱しているのかもしれない。そのことを述べ、ひとまずの了としたい。

\* 1 梁瀬正彦「今、何を改革すべきか？ 公民科の視点からの総合的学習～ひとりの『公民科』教師としての歩みをふりかえりつつ～」『清泉女学院中学高等学校研究集録』、第17号、2001年、82 - 83頁。

\* 2 同、83頁。

\* 3 上記以外には以下がある。「ひとつの感想」清泉女学院編集委員会『清泉』第23号、1972年、18-21頁。「贈る言葉一卒業生のみなさんへ」同『清泉』第25号、1974年、134-138頁。「不思議大好きおもしろまじめにみんなで公民一生徒による『授業』論一」『清泉女学院中学高等学校研究集録』、第14号、1995年、28 - 39頁。なお梁瀬氏の言葉および生徒のリアペは論文に紹介されたものも含めて、出典を省略する。

\* 4 「目標・達成・評価」モデルおよび「主題・探究・表現」モデルについては以下を参照のこと。佐藤学『教育改革をデザインする』岩波書店、1999年、111頁以下。